

母子変容

上

有吉佐和子

講談社

母子変容 上

昭和四十九年三月二十八日 第一刷発行
昭和四十九年四月二十八日 第二刷発行

著 者 有吉佐和子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二二／郵便番号 一一二
電話 東京(〇三) 九四五―一一一(大代表)／振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

落丁本・乱丁本はおとり替えます。
© 有吉佐和子 一九七四

母子変容

上

題
字
町
春
草

軀^{からだ}を動かすと自分の体温であるのに、その温かみがもの懐しい。耀子^{ようこ}は眼を閉じたままベッドの中の感触に朝を感じていた。何が快いといって熟睡した後の自然のめざめほど気持ちのいいものはない。昨夜は早々に彼女より年下の男が帰って行った。若い頃は恋人が帰ると言い出せば必ず一悶着^{もんちゃく}したものであるのに、数年前から耀子は男の自由意志を束縛しない方針で、その道ではもう達観^{たつかん}していた。男なんて、本当はいらないのだと彼女は思うときがある。隣に男が寝ているときは、めざめてそれが喜びになることもあるけれど、新しい芝居の前には却って煩わしいときの方が多かった。耀子は正式な結婚を二度しているけれど、夫であっても、恋人であっても、耀子が仕事に熱中しているとき、日常の些細^{ささい}なことで耀子の気持が逆鉤^{がんな}をかけられるようになるのは耐え難かった。そのために最初の結婚は離婚という終結を迎え、二度目の結婚は彼女の所属している劇団の代表者でもあり劇作家でもあり演出家でもあった山崎慎二郎^{やまざきしんじろう}が、彼こそは今日の森江耀子^{もりえようこ}を育て上げた男なのであったが、山崎が急逝^{きゅうせい}することによって、それから耀子はもう決して結婚はするまいと思いきめている。仕事を持っている女にとって、それも耀子のように女優として与えられた役には火のよにぶつかっていく芸の虫にとって、夫であれ、男であれ、傍

にいるのは煩わしきだけしか感じない。山崎慎二郎でさえ何度も呆れ果てて、実生活での耀子に「君は女じゃないよ、男だよ」と慨嘆したことがある。

しかし耀子の精神は夫をして二嘆三嘆せしめる剛直なところがあつたが、彼女の肉体は疑いもなく女性だった。新劇女優の中で、美人といえど彼女に最初の指が折られる。その艶麗さの故に、あまりにファンが多く、だから彼女は新劇女優ではないという悪口が公然と書かれることがあるのだが、耀子自身もその劇団も、そんなのは妬みだと歯牙にもかけていない。彼女の女優としてのキャリアは戦前からのものであつたし、耀子の兄の森江朋彦が山崎と共に結成したのが劇団・花の会という今では新劇団の大手の一つに数えられるものである。耀子は十六歳のときに兄にひっぱられていきなり舞台に出たのだが、その端麗な容姿はたちまち世間の注目の的になつた。兄の援護がなかったら、彼女はとうの昔に映画スタアに転身し、今ある声量は失つてしまつていただろう。運のいいことに、森江家は日本有数の財閥に連るところだつたし、山崎慎二郎もまた金持の息子で、多くの日本の新劇がその草創期にそうであつたように劇団財政は彼らの家から持出す金で賄われていた。大正から昭和初年にかけてのリベリズムの中で青春の血を湧かせていた彼らは理想を追い求め、空想社会主義と耽美主義という背反する二つのものを舞台の上で結びつけることに腐心していた。花の会は、だから耀子が低俗な映画などに誘われることを極端に嫌つたのである。

が、戦争と戦後が花の会の方針を大きく転換させた。最初は国策映画というものに森江耀子の出演がきまつた。軍部の圧力が背後にあり、花の会は新劇の中で唯一の共産党とかかわりのない劇団であることを、それによって立証しなければならなかつたのである。たつた一作で、森江耀子は花の会とは無関係の大スタアになつてしまつた。耀子の主演映画が、次々と企劃され、上映

された。森江朋彦も、山崎慎二郎もシナリオ書きになって、そんな自分たちを自嘲しあっていた。ときどき検閲官と対立するときだけが彼らの生甲斐になり、しかし森江耀子の人気に裏打ちされて朋彦も慎二郎も大事をひき起すことにはならなかった。

当時の耀子は映画撮影の合間は軍隊の慰問で、それは花の会の公演であったが、いつも軍部からは実演と呼ばれ、朋彦や山崎慎二郎たちを激怒させていた。彼らはチェホフやブレヒトを日本向けに翻案することによって、軍部に抵抗をしめしたが、原作がチェホフであったりブレヒトであることを見ぬけた担当官は一人もいなかった。耀子はただもう忙しくて、その頃の記憶といえ

ば眠りたいと思って過していただけた。眠るということは健康維持のためにも、美容を保つ上でも絶対不可欠の条件だと、今では森江耀子の生活信条の第一のものになっている。もう何年も前から、若いと言われるのが嬉しい年齢になっているのだった。生れつき白くて初々しい肌を持っていたが、それを褒められる度に近頃の耀子はそれをどのくらい長く保つことができるかを考えるのだった。化粧品というものに耀子はあまり信をおいていなかった。かつて美しいといわれていた人の老いざまを見るにつけても、耀子はああはなりたくないと思う。それには肉体を疲れさせないこと、肉体を衰えさせないこと、そのためには充分な睡眠をとらねばならない。そう思う頃から、耀子は恋人がきても同棲したいとは思わなくなった。四六時中つきまとわれるのは煩わしいし、眠りたいときに眠れず、相手の欲求次第で起こされるのも迷惑だった。こんな自己本位にものを考えるようになったというのも、過去の恋愛が彼女に与えた教訓だけではなかった。彼女は美しくもなければ上手でもない女優の末路の惨めさを、映画界でさんさん見聞きしたのである。戦後の映画黄金期に、彼女がその世界を振り切って花の会に戻った理由の一つであった。

耀子はベッドの中で、けだるくめざめ、起きようか起きるまいかと迷いながら、床のぬくもりに身悶えする時間が一日のうちで一番好きだった。この曖昧な気分と甘美な怠惰が許されるのでなければ、女優という仕事を続けることはできなかっただろう。彼女は両手をあげ、二の腕の白さが昏い部屋の中で匂うように見えるのに気をよくしてから、脚に思うさま力を入れて全身を伸ばした。それを数回繰返した。これが耀子の美容体操なのである。

それからまだ三十分も耀子は朝のめざめを楽しんでいた。彼女が映画の仕事に自分から興味を示さなくなったのは、あんまり朝早く叩き起こされたり、昼も夜も時間かまわずセットの中で強烈なライトを浴びせられることに生理的な反撥を感じ始めたからである。それともう一つは花の会の経済状態が、初期とあまりにも違ってしまつて、森江耀子が出演しなければ客が来ないことがはっきりしてしまい、事実上彼女の劇団になつて、兄の森江朋彦も夫の山崎慎二郎も死んだ後の責任はすべて耀子の肩にかかつてきているのも、耀子が舞台だけに専念する理由になつてゐる。幸せなことに、家は戦前の森江家の充分敷地もある立派なものが焼けないで残つていて、劇団の若い独身の女優たち数人が住みつき、みんな耀子を崇拜しているので、耀子はこの家の中でも女王のような待遇を受けて暮せていた。

ようやく耀子は枕許のサイドテーブルに備えてあるブザーに手をのばし、軽く二度ばかりそのボタンを押した。遠くで、オルゴールのような音が鳴る。

やがて、

「お早うございます」

加能千枝子が両手で洋式の盆を捧げて部屋に入つてきた。それをそつとサイドテーブルのせると、窓のカーテンを一つだけひいて朝の陽光を部屋の中に導き入れると、そのまま耀子の顔も

見ず、音もたてないようにして出て行ってしまった。千枝子は家にいる女優志願者の中で一番若い。劇団ではまだ研究生という身分で、正式の劇団員になれるのは一年先の試験に合格してからである。が、耀子は彼女がある日、楽屋に耀子を訪ねてきて、どうしても女優になりたいと言いつ出したときから、彼女には特別に親密な感情を持っていたし、劇団の研究生にしてみると、なかなかの資質を持っていることも分ったので、将来を嘱望しているのであった。千枝子が昭和二十三年生れだということも、耀子の意識の中には、いつもある。それで一層愛しいのかもしれないと思っていた。

カーテン一枚で部屋は柔かな明るさになっていた。耀子はゆっくり半身を起し、盆の上の蜂蜜と朝鮮人蔘エキスを混ぜた温い牛乳をとりあげて飲んだ。こういうものと果物と生野菜が、耀子の食事の主役になってから久しい。それから老眼鏡をかけ、盆の上に四つ折りで乗っている新聞をとり上げる。

第一面はでかかど沖繩に関する日米協議委員会の記事が出ている。沖繩船舶には琉球を示す三角旗と日の丸並揚が決定されたという。耀子は彼女の女優という生涯を通して、新劇人が昭和初年に謳歌した自由が、戦争中に受けた弾圧で押しひしがれ、敗戦後の進駐軍と共にめざましく甦えり、それが再びレッドパージで凋んでしまったのを見てきているので、政治という潮流には乗りたくないものだと思っている。それが彼女の美しさと相俟って新劇では珍しく政治信念のない女優だという悪口に繋るのだが、もう耀子もそろそろ世間の取り沙汰は聞き流せるようになっていた。なんといっても女優は舞台成果だけが問われるのである。どんな過激な思想家でも女優である限り下手では観衆を感動させられない。

近頃になって急に頁数の殖えてきた新聞を繰っているうちに、芸能欄へきて急に記事の方から

耀子に向って飛込んできた活字があつた。森江耀子という他ならぬ彼女自身の名前が、その小さな記事の見出しになっている。その記事には顔写真がついていたが、それは大昔の耀子の写真なのか、耀子に覚えのないものだった。

新聞を取り直すようにして読んでみると、

森江耀子の二世、銀幕にデビュー

と、それは耀子自身のことではなかった。耀子はどきっと全身がゆさぶられるのを感じた。先刻入ってきた千枝子が、耀子の顔を見ずに出て行ってしまったのが思い出された。耀子が十九年前に産んだ娘と、千枝子は同じ年であつた。

記事は、こう続いていた。

新劇界の女王というより戦前から戦後にかけて映画界で名声をあげていた森江耀子さん（四六）の一人娘が、このほど女優として母の後に続くことを決意した。本名は土村輝代子さん（一七）で、芸名は葵輝代子として新興映画でデビューする。監督の松永英生が彼女のためにシナリオも書きおろし、近くクラנק・インする予定。

写真は、耀子のものでなく葵輝代子のものであった。記事の終りは彼女の談話で締めくくられていた。

「幼いときから憧れていた母と同じお仕事ができるのかと思うと夢のような気持です。母のようになり、いい女優になりたいと思っています」

耀子は茫然^{ぼうぜん}としていた。輝代子が三歳になった年に別れて以来、会ったことがない。土村晴夫というのが輝代子の父親の名で、耀子が銀幕で活躍していた時代には大スタアだったのに、もう世には忘れられてしまったのか新聞記事には名前も出ていない。そのことにも耀子は茫然としていた。

今のように自由恋愛が許されていない時代だったから結婚してしまったものの、土村晴夫と森江耀子との結びつきは最初から不自然なものだった。幼いときから不自由を知らずに育ち、知的な環境の中で成長してきた耀子にとって、戦後迎えた混乱期と映画界の盛況は、彼女の判断力を失わせるものであったのだ。男といえば時代の先端を行く知識人しか知らなかった耀子にとって、映画の相手役として容色に過剰な自信を持っている以外は何もない美男スタア土村晴夫の求愛は、まるで思いがけなかったし、その行為の強引さは、それまで耀子を取り巻き互いに牽制^{けんせい}しあっていた青白きインテリにはない魅力があつて、花の会の全員が猛反対していることも一つのバネになり、耀子は土村の胸の中に飛込んで行った。土村は古い日本の封建的な男だったから、結婚の条件に女優引退を要求し、二十七にもなっていたのに耀子は土村の言うがままになった。もともと自から好んで女優になったのではなかったし、兄たちの保護と監視の下ではろくに恋愛もできず、女として熟れきっていた耀子には、蛮勇でもいいから大胆な男の出現こそ待っていたものだったのである。舞台に未練などあるとも思えず、女にとって家に入り妻となり子を産んで平凡な生活を掴^{つか}むことが至高の幸福だとそのときは信じこんでいた。

焼野原になった東京にも未練がなかったから、栃木の山奥にある土村の両親のいるところに行つて暮すのも田舎を知らない耀子にはまだ見ぬ夢の世界だった。そして現実の結婚生活は、ただただ無惨という他はなかった。結婚式のときにはもう妊娠していたので、悪阻^{あくそ}と姑^{しよとめ}と不馴^{しん}れな

台所仕事という三重苦が一度に襲いかかってきた。土村が耀子をいきなり彼の両親のところへ送りつけてしまった理由は、彼にとっては耀子のそれまで生れ育った環境に対する彼らしい愛憎の表現だったようだ。森江家と耀子をこの機会に全く切り離してしまおうと彼は考えたようだ。もう一つは美男俳優という彼の自意識が美しい耀子が腹部をふくらまして醜い姿になる有りさまを東京の誰彼には見せたくないだったのである。舅は恬淡として乾物屋の店先で小僧一人を使って暮らしていたという地獄で無我夢中で過した。舅は恬淡として乾物屋の店先で小僧一人を使って暮らしていたが、家の中では姑と土村の妹二人が耀子の作りを悉く嘲嗤っていた。姑は外の人間に対しては耀子の出自を自慢して、その縁戚に華族がいることなど数えたと吹聴していたが、家の中では耀子の箸のあげおろしも面白くなかったらしく、妊娠中の異常な食欲を、お姫さま育ちなどとは嘘の皮だと言ってこきおろした。東京の食糧不足は、ともかく映画界で売れている俳優には無関係だったが、山の中の田舎町には配給米が乏しく、土村の家は乾物屋だから農家の米と代替する品物は充分あったにもかかわらず、姑は配給量のことばかり言って、一膳の麦飯でも耀子には惜しんだ。

土村晴夫はアメリカの二世の運転する大型の車で月に一度くらい古里に帰ってきたが、進駐軍から横流しの清涼飲料や罐詰類を親や妹たちに景気よく振舞って、耀子に対しては一個のカップケーキも与えようとせず、

「おい、がつがつ喰うといってお袋が魂消てるぜ。お姫さま女優も形なしだね」

と揶揄し、それは彼のデイモニーシユな愛情の表現だったのかもしれないが、人前のことではあり、身重のせいもあって耀子は辺りがまっ暗になるような思いがした。兄たちが口を酸くして止めたように、この結婚は失敗だったのだ、と骨身にしみて思い知ったが、もはや出産ま

であと二ヵ月もないときに、まして戦前の教育と堅い一方の家で育った身には離婚など思いもよらなかった。

輝代子が生れたのは春先で、充分食べていなかったのと、二十七歳という年齢が手伝って、陣痛が始ってから分娩まで二十時間もかかってしまった。耀子が唸うなっている枕許で姑は産婆に、

「子供の産める躰ではねえべ。俺は最初からそう呪のろんどっただ」

と囁やくのを聞いて、耀子は死んでやろうかと歯を喰いしばった。あのときの怒りがなかったら本当に輝代子は生れていなかったかもしれない。姑に対しては、どんな嫌みを言われてもただ面伏せに暮して耐えてきて、子供を産む土壇場にきて、耀子の怒りは噴火し、その勢で輝代子は耀子の胎内から飛出したのだった。股間こかんで鮮魚のように子供がはねるのを感じ、やがて爆発するような産声を聞いたときの勝利感を、耀子は今でもまざまざと思い出す。もう怖ろしいものはない、とあのときから耀子の躰には今日ある猛々しさが芽生えたのだった。

「女の子だぞ、晴夫によく似とるぞ」

姑は生れたのが女であることが不足で、孫が息子に似ているのが自慢で、同じことを何度も繰返したが、ふだんは無口な舅が、

「一姫二太郎よ、最初は女がええだ。俺の目には晴夫よりも耀子さんにそっくりに見えるわい」と、はつきり言った。

耀子にとっては、皺だらけの小さな生きものの顔は、土村にも耀子にも少しも似ているとは思えなかった。むしろ姑に似て醜い女になるのではないかという予感さえした。乳をふくませながら、これで東京へ帰ることができる、と、そのことが一番嬉しかった。

姑は不満だったが、土村にしてみれば耀子が前通りの美しい姿態に戻れば、東京のわが家に飾

っておきたいという男の虚栄心があつたから、輝代子は生後一ヵ月で青い色をしたボンテヤックで、母の腕に抱かれたまま東京に着いた。土村の家はすでに彼の取り巻きという有象無象が巢喰うところとなっていて、昼から酒を飲み、土村と耀子と輝代子の凱旋を迎えるという口実で、明け方までどんちゃん騒ぎを続けていた。家の中で一番粗末な二階の一室で、耀子は輝代子の寝顔を眺めながら、帰ってきた東京の家も、二人にとって安住の地でないことを悟り、涙を流した。

育児は、十分忙しかった。姑から嫌やみを言われることはなくなった代り、輝代子が夜泣きをする時耀子は理由をあかこうかと思ひ惑つて自分まで泣きながら医者呼んだ。土村はロケーションを口実にして滅多に家に帰ってこなかったので、遂には兄妹の縁を切った筈の森江家に電話をし、三人の子供を産み育てている嫂あによめに助言を求めた。

やがて間もなく兄の森江朋彦が、輝代子連れてともかく家に帰って来い、と言いにきた。

「そんなこと、土村がどんなに怒るか知らないわ」

「土村に、なんの資格があるんだ。あの男が外で何をしてるか僕は詳しく知っている。あんな下司な奴に盗られるなどとは僕は思つてもいなかった。耀子をこのままにしておくのは、森江家にとつても屈辱だ。帰れ」

「帰れつて、土村に離縁されたら私はどうなるんです。とても淫みだらな女だと世間から後指さされて一生を過ごすの、お兄さま」

「誰がそんなことを言うものか。みんな世間知らずのお前が土村というやくざな男にひっかつたのだと思つている。耀子は被害者なんだよ」

「でも輝代子がいいます。輝代子を父なし子にするわけにはいきません」

「何を言ってるんだい。戦争が終って僕たちが待望していた新しい時代が来ているんだよ。離婚が女の傷になるような時代は昔話だ。花の会でも、みんなが耀子の帰りを待っている。山崎などは君が結婚してからこの方、まるで腑ぬけのようになって意気が上らない。花の会こそ土村の犠牲になった。有望な俳優が二人も戦死して、一人はまだもって復員してこない。十五人もいないんだよ、俳優が」

「でも、もう舞台なんて捨てたつもりで結婚したんですから」

「耀子をうっかり映画に出したのは僕の責任だと思っている。あんな低級な世界へ入れてしまったのは狼の群の中に羊を放つようなものだった。山崎もそう言ってるよ。花の会ではみんなの責任だと痛感しているんだ。苦勞をさせて本当にすまなかったねえ」

兄の朋彦は、耀子の指先が荒れているのを見て涙を流した。

2

離婚などということを耀子自身はどんなに苦しいときでも考えることはなかったし、まして自分の口から土村に言い出すつもりもなかった。しかし土村晴夫の人氣が耀子の上京前後から急速に衰えかかっている、映画会社のプロデューサーたちは早くも彼の前途に見切りをつけていた。その代りに彼らは耀子の容色が少しも衰えていないどころか、前に増して凄艶さを増し、前にはただ美しく上品であるばかりだったのが奥深い魅力を増えていることに目をつけた。

彼らはまず耀子に映画出演をすすめ、耀子が尻込みしていると土村晴夫を口説き始めた。彼ら

は土村の性格を熟知していたし、土村が人気の下火になったことに気付いて荒れているのにも気が付いていたから、耀子の出演を条件に土村にも主演映画の企画があるといって餌を撒いた。海千山千の腕さきのプロデューサーの前で土村晴夫などはいわば彼らの思うままに操ることができた。結果は土村が、

「家庭に入った女ですから、当人も女優の足は洗ったつもりになっていますが、まあ家庭第一に考えてくれるのなら僕は構いませんから、僕から話してみましよう」

と、恩着せがましい返事をし、プロデューサーたちは北叟笑んだ。

企画は甘ったるいメロドラマで、耀子としてはまったく不本意だったから、

「嫌いですよ、私は女優をやめたんですもの」

頭から受けつけなかった。兄の花の会の勧誘でさえ断ったのだ。とてもその気にはなれなかった。が、土村晴夫にしてみれば、耀子が出演しなければ、彼の主演映画の企画も流れてしまうのである。耀子が抗えば抗うほど、土村の態度は高圧的になった。

「俺がこれだけ言っても聞かないのか」

叫ぶと同時に手が飛んでいた。張り倒されても耀子には抵抗する立派な理由があった。

「輝代子がいるんですよ、あなた。私が撮影所なんかに行って間、誰が輝代子を育てるんですか」

「お袋にきてもらえばいい」

「なんですって」

「お袋はお前なんかより子供の育て方はずっとうまいよ。お前が輝代子を抱くと、危なかしくて見ていられないと言っていた」